

## 27. インスリノーマの局在診断に、選択的カルシウム動注負荷後静脈採血法 (ASVS) が有用だった2例

放射線医学

比企太郎, 藤岡陸久

【目的】 インスリノーマは微小でも発症し、局在診断に難渋する。ASVSが有用だった症例を検討する。

症例1: 60歳台男性。原因不明の低血糖発作で他院にてインスリノーマ疑いにて精査中、肺癌を指摘され手術するも改善せず。内分泌検査ではインスリン高値だが、いずれの画像診断でも腫瘤を特定できず。ASVSにより腓尾部に病変の局在を証明できた。症例2: 30歳台男性。数年前から異常行動出現。側頭葉癲癇として治療されていたが、血液検査にて低血糖指摘。精査の結果インスリノーマが原因と判明。画像診断では腓体尾部に腫瘍1個あり。ASVSにてそれ以外に微小な腫瘤が無いことを確認し手術施行。現在再発なし。

【結果】 ASVSはやや煩雑な検査であるが、侵襲度は低く、通常画像診断では特定困難な微小腫瘍でも病変の有無の証明、局在の絞り込みが可能である。有用だが稀な検査でもあり、検査技術的な考察を含め報告した。

## 28. 運動時呼気熱量の検討

越谷病院呼吸器内科

一和多俊男, 阿部篤朗, 松尾隆司, 高山賢哉, 藤原寛樹, 濱島吉男, 長尾光修

【目的】 COPDにおける運動時呼気熱量を測定し、生理学的意義について検討した。

【対象・方法】 男性COPD患者13名 (%FEV<sub>1</sub> 43.5±9.6%) と男性健常成人7名を対象にして、症候限界性運動負荷試験を行った。チェスト社製呼気温度モニターで測定した呼気温度シグナルを、ミナト社製呼吸代謝測定装置 (AE280) に入力して、呼気熱量 (V\*Temp) を測定した。

【結果】 COPD患者の運動耐容能は低下していた (VO<sub>2</sub>max 874±253ml/min)。運動時呼気終末最高温度とVO<sub>2</sub>maxの間には有意な相関関係は認めなかったが、仕事量に対する呼出熱量変化 ( $\Delta V*Temp/\Delta W$ ) とVO<sub>2</sub>maxの間には、有意な正の相関関係を認めた (R = 0.745, P < 0.005)。

【結論】  $\Delta V*Temp/\Delta W$  は、COPDにおける運動耐容能を規定する1因子である可能性が示唆された。